

## 宮崎汎会員が見た世界の旅

### 第1部編第17話・映画「王様と私」に見るタイの歴史 タイ

王様と私は1956年アメリカの20世紀フォックス製作の映画である。マーガレット・ランドンの小説「アンナとシャム王」を原作にしている。

主演の俳優ユル・ブリナーの演じる映画は何本か見たが禿頭の頭と鷹のような鋭い眼光が強烈な印象で、彼の笑っている顔は思い浮かばない。西洋でも東洋でも特に違和感が無く通じる不思議な風貌である。ユル・ブリナーは“王様と私”でアカデミー主演男優賞を受賞したが、相手役は素敵なデボラ・カーである。

理知的なデボラ・カーが演じるアンナはイギリス人で、ユル・ブリナーの演ずるシャム（現タイ）の王様の大勢の子供たちの家庭教師に乞われる。イギリスと比べるとシャムの文化は風俗習慣、価値観全てが異なり、アンナと王様の意見の食い違いは、時として激烈なやり取りとなる。王様は内心では家庭教師であるアンナに感謝しその功を高く評価するが、アンナはかたくなの王様に失望し辞めて帰国しようとするも、アンナに対する王様の真の気持ちが理解できる。王様はようやくアンナと心が通じ合え、安心して永の眠りに就くといった展開であった。

映画は実話に基づいている。タイの国王ラーマ4世の子供たちの家庭教師であったアナ・リオノウズの回顧録がベースとなっている。

タイの歴史をたどると「王様と私」がテーマとなっている時代は1860年代である。タイの風習に加えてヨーロッパ先進国の学問を、将来国を背負っていく子供たちに教え込むために家庭教師をわざわざイギリスから招いたことに王様の国を思う先進性を感じたものである。

タイの国土は日本の1,4倍人口は4800万人で90%はシャム・タイ族である。国民の3分の2は中国人の血が入っているとされている。国民は熱心な仏教徒だが、日本の大乘仏教とは異なる小乗仏教（=上座部仏教）である。

タイの歴史は13世紀クメール帝国の衰退を見てタイ族の最初の独立国をスコータイの地に造ったことに始まる。クメール文字をもとにして現在見るタイ文字をつくり、宗教は上座部仏教を国教とした。スコータイ社会は明敏な国王に加え食糧も豊富で人々は豊かに暮らし、問題が起こると直接国王に訴え解決を図った。特にスコータイをおさめたラームカムヘン大王は善政を施し今に至るもタイ人の評価は高い。

スコータイ時代からおよそ100年、衰えた王朝に替わり首都をアユタヤの地に、アユタヤ王朝を打ち立てた。アユタヤ王朝は繁栄し33代の王に引き継がれ417年間続くことになる。



建国者であるラーマティポーディー一世は初の法典をつくるなどした。アユタヤ王朝は力をつけて1378年にはスコータイを滅ぼしタイ全土を統一し大国となった。さらに1431年には強大なクメール帝国（現カンボジア）の首都アンコールを攻め落とした。最盛期アユタヤには寺院の数が数百に及んだという。16世紀になるとアユタヤ朝に衰えが目立ち隣国ビルマの侵入を許し、遂には1569年ビルマ軍によっ

アユタヤの仏教寺院遺跡

て首都アユタヤは陥落した。ビルマ軍は徹底した破壊

を行い、アユタヤは15年間ビルマの支配下に置かれた。しかしビルマが中国の清朝と争っている間に、タイはビルマを追い落としアユタヤを奪還したのである。ビルマとの抗争は今日に至るも両国民の感情に微妙なしこりとして残っていると聞いている。

アユタヤ王朝が倒れタイ国内は混迷した。この中から中国人を父にタイ人を母とするアユタヤ王朝の官吏であったタークシンが華僑の支援を得てアユタヤを奪還し、1767年トンブリーを首都に自ら即位した。彼は軍事面では優れ才能を発揮したが晩年は非業の死を遂げた。トンブリー王朝はわずか一代15年であった。

1782年、次の王朝を担ったのはラーマー一世でチャクリー王朝の初代国王となった。ラーマー一世は首都をトンブリーからチャオプラヤー川を渡ったバンコクに建設し、それが現在に続くチャクリー王朝である。



タイの王宮

バンコクに現在に見る王宮や王宮の寺院であるワット・プラケーオが建てられると、そこへラオスのヴィエンチャンから戦利品として持ち帰った有名なエメラルド仏を安置した。王宮は一般に開放されタイ観光の大きな目玉になっている。エメラルド仏は意外に小さく感じるが祈りの列は絶えない。タイの近代化はタイのラーマ4世ならびに5世の統治の時、ヨーロッパ諸国と国交を樹立した。映画のモデルになった時代である。二人の名君による統治によって近代化

への改革を進め、また王は優れた外交手腕を発揮し、タイはヨーロッパ列強の植民地支配から逃れた東南アジア唯一の国となったのである。



バンコク王宮付近



エメラルド仏のあるワット・プラケーオ



エメラルド仏

英仏の進出によってタイの獲得した領土を割譲したりする中、1925年ヨーロッパに留学していた学生7名によって政治体制の変革を求めるクーデターがおこった。国王ラーマ7世はこれを受け入れ臨時憲法が制定された。王や王族は存続するが、それまでの絶対君主制から立憲君主制へと移った。1939年国名をシャムからタイに変えた。

第二次世界大戦日本とタイは日泰攻守同盟条約を結んだことによりアメリカ大使はタイに抗日組織を作り上げるなどした。その結果タイは連合国に対し敗戦国のレッテルを逃れられた。

スイスから帰国したラーマ8世の跡を継いだ弟のラーマ9世（プーミポン・アドゥンデート）は在位1946年～2016年まで長期にわたり王位にあり国民の人気は絶大であったことは記憶に新しいところで、タイでは王様は国民から敬愛された絶対的な存在であるように感じる。前プミポン国王の前では権力を持つ軍のトップでも跪き、ひれ伏す場面をテレビの画面でみて驚いたものである。

タイはほほえみの国と称されるように、国民は信心深くにこやかで屈託がなく、市内を流れるチャオプラヤー川のように動作もゆったりとして品位を感じる。しかし歴史が示すよう決して優柔不断な国民ではない。敢然と敵に立ち向かう強さを内に秘めているのである。（1991年）

余談 隣国カンボジアのアンコールワットは同国の観光の目玉で世界各地から大勢の観光客が押し寄せているが、観光基地はシェムリアップである。

1431年タイは強敵カンボジアを攻め滅ぼした。シェムリアップとはカンボジア語でタイ（旧名シャム）を追い出すの意味である。